

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	ヒッタイト語の動詞体系について
Author(s)	大城, 光正
Citation	ニダバ , 13 : 14 - 20
Issue Date	1984-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047150">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047150</a>
Right	
Relation	



## ヒッタイト語の動詞体系について

大 城 光 正

## I. はじめに

原印欧語の複雑な動詞体系に較べて、ヒッタイト語の動詞体系は非常に簡単化されたものになっている。この簡単化を原印欧語のより古層の体系保持と解する説も存在するが、<sup>(注1)</sup> 逆に、急激に改変した結果と見做す説が有力である。<sup>(注2)</sup> ヒッタイト語は原印欧語に直接的に対応する古期的徴条を有するのみならず、時代の下がった諸言語にみられる助動詞と分詞による合成的完了形のような近代化表現の保有という、古層と最新層の両徴条を有する特異な言語であることが明らかになってきた。ヒッタイト語の動詞体系の簡単化、単純化は、原印欧語から分出して、急速な言語的改変をとげた典型的な徴証ではあるまいか。そこで、この小論において、同言語の動詞体系を、特に、-hi 活用動詞の発現と中動相 (Medium) の形成を中心に考察してみたい。

## II. -hi 活用の形成について

ヒッタイト語動詞体系は、二つの法(直説法/命令法)、二つの時制(現在/過去)、二つの相(能動相/中動相)、二つの活用(-mi/-hi)を有しており、人称的区別は単数・複数(双数は発現していなかった)に一・二・三人称が存在した。同体系の中で、最も特異な形態は、-mi/-hi(直説・能動・現在・単数・一人称の屈折語尾に由来)活用の区別であろう。-mi 動詞は、サンスクリット. *ás-mi*, ギリシャ語. *εἰμί* (< \*es-mi), ヒッタイト語. *eš-mi* 「私は…である。」のような形に対応する athematic (無語幹形成母音)タイプである。-hi 動詞は印欧語の完了の形態に対応するもので、同形態を基層としてヒッタイト語独自の変革によって形成されたものと思われる。<sup>(注3)</sup>

ヒッタイト語の -hi 活用・直説・能動・現在・単数・一人称に当たる語尾形は -hi であるが、古期ヒッタイト語資料においては、-he の形(楔形文字形 *-hé*)が散見される。同形は、-hi 動詞が完了形 *-ha* と *-i* の結合形から形成されたという重要な証拠 (*\*ha-i* > *-he* > *-hi*) を示唆するものである。同指摘は二・三人称の形成に関しても、*\*ta-i* > *\*te* > *-ti*, *\*a-i* > *\*e* > *-i* の推移を措定させるものである。<sup>(注4)</sup>

	印 欧 語	古インド語	古ギリシア語	ヒッタイト語 (-hi)
単・1	・*h <sub>2</sub> e	-a	-a	-he/-hi(<*ha-i<*h <sub>2</sub> e-i)
2	・*th <sub>2</sub> e	-tha	-tha	-ti (<*ta-i<*th <sub>2</sub> e-i)
3	・*e	-a	-e	-i (<*a-i<*e-i)

ヒッタイト語の -i 要素に関しては、サンスクリット. ay-ám(男性), i-d-ám(中性), ラテン語. is と id, ゴート語. is と ita という形に指示的な機能を有し、「現に今ここに」を意味する i の要素が認知されることから, i 要素は意味的「現在性」を明示し, 強調するものと考えられる。<sup>(注5)</sup> この現在性顕示要素が完了形に附添した根拠について, 泉井氏は次の如く推論している<sup>(注6)</sup> : 「印欧原語における完了形は, 第一義的に, 主語者による行為の完了後に引きつづいて後遺的に主語者をめぐって展開する「状態」を表現するものであった。後遺的な状態性を表現するために, その表現にはおのずから状態的な現在性が強くあらわれる。……」

ヒッタイト語の -i 附添による現在性顕示の体系は, 印欧語の第一次語尾と第二次語尾の形成(第一次語尾は第二次語尾に -i 要素の附添によって作られる。)に類するヒッタイト語特有の改変と言える。そこで, 古期ヒッタイト語資料をもとに, 直説法/命令法・能動相・現在/過去, -mi/-hi 活用語尾をまとめると以下の如くである :

		直説法・現在		直説法・過去		命 令 法	
		-mi	-hi	-mi	-hi	-mi	-hi
能 動	単・1	-mi	-hi/-he	-un	-hun	-allu(t)	-allu
	2	-ši	-ti	-š(-ta)	-ta	∅	∅
	3	-zi(<*ti)	-i	-t(-ta)	-š(-šta)	-tu	-u
相	複・1	-weni		-wen		-weni	
	2	-teni		-ten		-ten	
	3	-anzi(<*anti)		-er		-antu	

- ① 大半の現在形は過去形に現在性明示の -i 要素の附添によって形成されている。
- ② 過去・単・一人称 -un は印欧語 \*m, -hun は \*h(a) + un (-mi の語尾 -un (<\*m) から導入) から形成されている。他のアナトリア諸語の中では, ルウィ語, 象形文字ルウィ語, パラー語(過去・単・一人称) -ha, リュキア語 -χa, -ga (<\*ha) において, 印欧語完了形 -ha (<\*h<sub>2</sub>e) を保持している (cf. リュディア語 -uv<\*m)。
- ③ -hi 動詞・過去・単・三人称 -š は例外的であり, 本来ならば, -a (<\*e) が措定されるであろう。-š の発現は s-aorist の普遍化したもの(単・三人称語尾 -s) である (cf. Skt. ánaís, Aves. dāiš 等)。-šta 形は, -š 語幹動詞 (ašeš-/ašaš, heš-/haš- 等) に見られる。
- ④ 過去・複・三人称 -er は, 印欧語完了形, -ère <\*eh<sub>2</sub>re<sup>(注7)</sup> の移入であろう。この -r 要素はサ

ンスクリット -ur (能動) -ré (中間), 又は, ラテン語 -ēre (ex. fu-ēre 「～であった」) に暗示される完了形の一つの指標であった。ゆえに, この -er は複・三人称・-mi/-hi 共通の語尾であるが, -hi 活用から -mi 活用に拡大使用されたことを示唆している。他のアナトリア諸語では, 原印欧語  $\cdot\text{nt}$  に照応する形を保持している(ルウィ語, パラー語 -nta, 象形文字ルウィ語 -(n)ta., リュキア語 -ātē (<  $\cdot\text{nte/a}$ ), リュディア語 -l (<  $\cdot\text{d} < (n)t$ )).<sup>(註8)</sup>

- ⑤ 命令・単・一人称 -allu(t) は小辞 -l に命令形顯示 -u 要素の附添である。-t の付加は ešlit/ešlut, ašallu 「eš- “to be”」にみられるが, 本来は -allu 形であろう。<sup>(註9)</sup>
- ⑥ 命令・単・三人称・-mi 屈折, -tu: -hi 屈折, -u の両形は, 直説・現在・単・三人称・-mi 屈折, -zi (<  $\cdot\text{ti}$ ): -hi 屈折, -i の対立に類するもの (-ti: -i = -tu: -u) である。-u は上記の如く, 命令形を明示する一つの指標である。
- ⑦ 他のアナトリア諸語で -hi 動詞形が確証されるのは, パラー語, ルウィ語, 象形文字ルウィ語であるが, それは直説・現在・単・三人称 -i 形のみである: パラー語<sup>(註10)</sup> (hu-wa-ar-ni-na-i 「水を掛ける」 mu-ú-ši = muš-i 「満足になる」 ša-pa-u-i-na-i 「清める」) ルウィ語 (mu-u-wa-i 「強制する (?)」 ar-pa-ša-a-i 「思わしくない」) 象形文字ルウィ語<sup>(註11)</sup> (á-sas-za-i 「話す」 i-zi-i-sa-ta-i 「敬意を払う」 pi-ia-i 「与える」等)。特に, 象形文字ルウィ語の -hi 動詞・現在・単・三人称 -i 語尾保有の数は33動詞 (-mi 活用 -ti 語尾形28例) にのぼる。

### Ⅲ. 中動相の形成について

ヒッタイト語 -hi 活用が原印欧語完了形を変革することによって形成されたのに対して, 中動相は同形を中心的存在に据えて, 諸々の形成要素の附添によってつくられている。原印欧語の完了形から中動相の発現への過程は決して異例のものではない。泉井氏はそれを見事に推論されている。<sup>(註12)</sup> : 「……ヒ語の中動相現在にあらわれるヒ語的な完了形も, 行為完了後の状態を強くあらわしていた。ただ, 本来の中動相の表現はそこにおのれの利害の関係をもつ主語者の介入なしには考えることができないものであったのに対して, ヒ語では, その行為の発源者は, その動詞の主語者でもなければ, また, その表現の発話者でもなく, それら以外の全くの別人, または人力を超える超自然的な「ある力」であった。従ってむしろ非人称的な「あるもの」が完遂していた行為の結果が主語者または発話者の不知の間に実現されて, その結果の状態を知る, または目にするだけだった。……そして, やがて, ヒ語においては, 単なる受動相の一形と感じられるようになった。……」

従来のヒッタイト語中動相語尾をまとめると, 以下の如くである。

	中動相・現在形	中動相・過去形	命令法
単・1	-ha, -ha(ri), -haha(ri)	-hat(i), -hahat(i)	-ha(ha)ru
2	-ta, -ta(ti)	-tat, -at(i) [-hi 屈折] -tat(i), -ta [-mi 屈折]	-hut(i)
3	-a, -a(ri) [-hi 屈折] -ta, -ta(ri) [-mi 屈折]	-at(i), -tat [-hi 屈折] -tat(i), -ta [-mi 屈折]	-aru [-hi] -taru [-mi]
複・3	-(a)nta, -(a)nta(ri)	-(a)ntat(i)	-(a)ntaru

(J. Friedrich, *HE. I.*; <sup>(1913)</sup> 泉井, 月刊「言語」8月, 1983年, 117頁。)

泉井説は、ヒッタイト語の中動相が原印欧語の完了形を基層的に保有されて形成されていることを明確にした点で、十分に蓋然性のあるものと思われ。しかし、泉井説には、同氏の見事な推論と引用された屈折語尾表のあいだには、相応しえないギャップが在り、又、十分に古期的資料を駆使して整理分類(-hi/-he 語尾を除いて)されていない点がある。更に、最も重要な点は、原印欧語の完了形を中心的な核として中動相がつくられ、又、同形に現在性明示の-i要素附添によって-hi屈折体系が形成されたという、つまり、それぞれ完了形から独自の発現をしたとする解釈にもかかわらず、-mi/-hi活用区別を中動相語尾変化形にも導入していることである。中動相は能動相と分別される範疇であり、能動相の-mi/-hi屈折語尾区分の中動相への導入はその本質と相反するものである。

〈例〉

印欧語完了(単・一人称)

$\begin{array}{l}
 \cdot *ha (< \cdot *hæ) \longrightarrow \text{現在性明示 } -i \text{ 附添 } (-hi \text{ 屈折}) \\
 \phantom{\cdot *ha (< \cdot *hæ)} \phantom{\longrightarrow} : \cdot *ha-i > -he > -hi \\
 \phantom{\cdot *ha (< \cdot *hæ)} \searrow \phantom{\longrightarrow} \text{原形} : -ha \text{ (中動相・単・一人称)} \\
 \phantom{\cdot *ha (< \cdot *hæ)} \phantom{\searrow} : -hari \text{ (-r 要素(非人称)と } -i \text{ 要素(上述)の附添)} \\
 \phantom{\cdot *ha (< \cdot *hæ)} \phantom{\searrow} \text{パラー, ルウィ, 象形文字ルウィ語} : -ha \text{ (能動・過去・単・一人称)}
 \end{array}$

ヒッタイト語の中動相の文法的意味は、上述の如く、行為完了後の状態性の強調、非人称的な行為の結果を示唆している。しかし、ヒッタイト語の動詞形のもつ文法的意味は、ギリシア語や古代インド語の中動相に類するところの、主語(者)から発して再び主語(者)に戻る行為の表現も有していたと思われ、更には、単なる受動的意味にまで解されるに至ったものと思われる。但し、この文法的意味区別はすべての人称語尾に発現されているのではなく、形態上の区別は三人称単数に存在するのみである。そこで、これらを次の如く分類することが可能となる：

- (1) Stative: 不定の持続性, 状態性を示す動詞。

(2) Impersonal: 非人称動詞。

(3) Medio-passive: 再帰性, 受動性を示す動詞。

特に, Impersonal に属する動詞の意味する行為の発源者は, 泉井氏の指摘<sup>(E14)</sup>の如く, 全くの別人, 人力を越える超自然的な「ある力」を暗示するものである。このグループに属する動詞として, a-「暖かくなる」, aš(š)-「良くなる」, išdu-「明らかになる」, takku-「囲まれる(?)」, dug(g)-「重要である」, ur-「燃える」, wag(g)-「欠けている」の7動詞が挙げられる。<sup>(E15)</sup>そこで, 中動相の語尾形をまとめてみると, 以下の如くである:

		直説法・現在			直説法・過去			命令法		
		Stative	Impersonal	Medio-pas.	Stative	Impersonal	Medio-pas.	Stative	Impersonal	Medio-pas.
中動相	単・1	-ha(ri)	/	-ha(ri)	-hat(i)	/	-hat(i)	-haru	/	-haru
	2	-ta(ri)	/	-ta(ri)	-tat(i)	/	-tat(i)	-hut	/	-tahut(i)
	3	-a(ri)	-ari	-ta(ri)	-at(i)	-at(i)	-tat(i)	-aru	-aru	-taru
	複・1	-wašta(ri)	/	-wašta(ri)	-waštat(i)	/	-waštat(i)	-wašta(ri)	/	-wašta(ri)
	2	-duma(ri)	/	-duma(ri)	-dumat(i)	/	-dumat(i)	-dumat	/	-dumat(i)
	3	-anta(ri)	-antari	-anta(ri)	-antat(i)	-antat(i)	-antat(i)	-antaru	-antaru	-antaru

- ① 現在形には, 許容任意的な -ri 要素の附添が認知される。-ri の -i は現在性明示の要素であり, -r は泉井氏の指摘<sup>(E16)</sup>の如く, 中動相現在形にみられる非人称表現顕示要素と考えられる。おそらく, 同要素は更に -\*re と -i に分析可能 (-\*re + i > -ri) であろう。<sup>(E17)</sup>それゆえ, Impersonal 動詞はかならず -ri 要素を保持することになる。パラ語, ha-a-ri (単・三人称「暖くなる」cf. ヒッタイト語 a-), ga-ša-a-ri は非人称動詞を暗示している。ルウィ語 -ari/-tari 形動詞も Stative/Medio-passive を示唆している。象形文字ルウィ語では Medio-passive i-zi-ia-ru 「it is made」を認めるのみである。
- ② 過去形は現在形に -t の附添によって形成されている。この -t 要素は過去性明示の要素と考えられる(cf. アオリストの接頭母音 (augment)\*e- は本来, 「そのとき」という意味をもつ副詞)。
- ③ 過去形には, 過去性を明示する -t の付加に, 更に, -i の附添した形が散見される。泉井氏<sup>(E18)</sup>によれば, この -i 要素は現在性顕示の -i 要素と無関係であると考えられているが, ヒッタイト語の中動相の文法的意味からすれば, 任意的に過去形の状態性・現在性の強調として付加されたとも考えられる。
- ④ Medio-passive ・単数・三人称要素 -ta は Stative や Impersonal よりも後に発現したもので, ギリシア語・中動相 -to, サンスクリット -ta (原印欧語 -\*to) に由来するものである。
- ⑤ 中動相の命令法においても, 能動相と同様に命令法顕示要素 -u- が認知される。一人称 -haru, 三人称 -aru/-aru/-taru はそれぞれ現在形の -hari, -ari/-ari/-tari と正確に照応(命令 -u: 現在 -i)

している。

- ⑥ 命令法・単数・二人称 -hut: -hu は特異な形態を有しているが、ehu「来い(単・二人称)」(uwa-「come」の命令形)の -hu と関係を有する要素と思われる。-t 要素は命令・単・二人称語尾 -t<sup>(注19)</sup> (it「行け」、tet「言え(te-)」、uwatet「持って行け(uwate-)」や causative-nu- 動詞にみられる単・二人称 -nut 語尾に確認される -t 要素)を示唆している。
- ⑦ 命令法・複数・二人称 -dumat が過去形と同形なのは能動相の命令法 (-ten) と同じ形成である。

#### IV. おわりに

上記の如く、ヒッタイト語の -hi 動詞と中動相は原印欧語の完了形を基層として形成されている。ヒッタイト語は原印欧語の複雑な法(mood)や時制体系を急激に簡単化、単純化していっただけでなく、他の印欧諸語には存在しない独特の -hi 活用と中動相の体系を完成させたと言える。その改変はアナトリア諸語の中でもヒッタイト語独特のものであったと考えられる。

#### 注

- (注1) Sturtevant, E.H., “Archaism in Hittite.” Language, vol. 9, 1933, pp. 1-11; 同上, Hahn, E.A., A Comparative Grammar of the Hittite Language, New Haven, 1951, pp. 8-9; 最近では, Cowgill, W., “Anatolian hi-Conjugation and Indo-European Perfect.” Hethitisch und Indogermanisch (以下, HuI と略す。), Innsbruck, 1979, pp. 25-39( Indo-Hittite theory の擁護)。
- (注2) 詳細は, 泉井久之助「印欧語の完了形とヒッタイト語の動詞体系」『言語』第12巻, 第8号, 1983年, 110-120頁を参照のこと。
- (注3) Kurylowicz, J., The Inflectional Categories of Indo-European, Heidelberg, 1964, 特に pp. 67-70; 同上, “Die hethitische hi-Konjugation.” HuI, pp. 143-146; Watkins, C., Indogermanische Grammatik, Bd. III, Heidelberg, 1969, pp. 69-87; Jasanoff, J.H., “The Position of the hi-Conjugation.” HuI, pp. 79-90; Eichner, H., “Die Vorgeschichte des hethitischen Verbalparadigmas.” Flexion und Wortbildung, Wiesbaden, 1975, pp. 71-103; Risch, E., “Zur Entstehung des hethitischen Verbalparadigmas.” Flexion und Wortbildung, pp. 247-258; 研究史の概説を含めて, Tischler, J., “Zur Entstehung der hi-Konjugation.” Gs. für H. Kronasser, Wiesbaden, 1982, pp. 235-249; 泉井久之助, 上掲論文。
- (注4) 単・二人称 -te 語尾形の在証について, Watkins, C., 上掲書 p.79 の引用例 (wa-ar-iš-ša-at-te) は -te < -ni > (-teni = pl. 2 の語尾, -ni の部分の欠損)を示すものであり, 古層の -te, -e の確認は存在しない。後期テキストに散見される -te, -e 形は, -te/-ti, -e/i における文字表記上の variant にすぎない: Eichner, H., “Phonetik und Lautgesetze des Hethitischen — ein

- Weg zu ihrer Entschlüsselung.” Lautgeschichte und Etymologie, Wiesbaden, 1980, pp. 142-143; Tischler, J., 上掲論文 p. 237. note 13。
- (注5) 風間喜代三「比較文法の過去と現在」『言語』第6巻, 第12号, 1977年, 73頁; 泉井, 前掲論文, 116頁を参照のこと。
- (注6) 泉井, 同上, 118頁。
- (注7) Oettinger, N., “Die indogermanische Stativ.” MSS, 34, p. 109; Watkins, C., 前掲書, p. 43; 風間, 前掲論文79頁; Eichner, H., 前掲論文, 1975, pp. 86-87。
- (注8) Oettinger, N., “Die Gliederung des anatolischen Sprachgebietes.” KZ, 92/1, 1978, p. 86; Eichner, 1975, p. 80。
- (注9) Oettinger, N., Die Stammbildung des hethitischen Verbuns, Nürnberg, 1979, p.15. note 12; Eichner, 1975, pp. 80-81:  $\text{ešlit} < *\text{éš}(\text{s}?)\text{alid}^{\text{h}}\text{i}$  (mit  $-\text{d}^{\text{h}}\text{i}$  aus der 2. Sg. Imp.)。この $-\text{d}^{\text{h}}\text{i}$ 要素は後述の命令・単・二人称 $-\text{t}$ 語尾(it「行け, (pai-の命令形)」, tet「言え(te-)」等)を示している。又,  $-\text{lla}$ は, 接続法・thematic・能動・単・一人称形の保存とみなす: 反論として, Meid, W., “Der Archaismus des Hethitischen,” HuI pp. 171-172。
- (注10) 用例は, Carruba, O., Das Palaische Texte, Grammatik, Lexikon, Wiesbaden, 1970, による。
- (注11) Morpurgo-Davies, A., “The Luwian Languages and the Hittite  $-\text{hi}$  Conjugation.” Fs. for O. Szemerényi, Amsterdam, 1979, pp. 577-610。
- (注12) 泉井, 前掲論文119頁。
- (注13) Friedrich, J., Hethitisches Elementarbuch (I), Heidelberg, 1960, p. 77。
- (注14) (注12)に同じ。
- (注15) Oettinger, MSS, pp. 136-141。
- (注16) 泉井, 117頁。
- (注17)  $-\text{r}$ 自体の語源と原義に関してはいまだ定説はないが, 上述の如く, 非人称表現明示の要素と思考される。 $-\text{r}$ を本来 $-\text{re}$ 形とみなすことについては, Eichner, MSS, 34, pp. 109-149とOettinger, 前掲書, Nürnberg, を参照のこと。
- (注18) (注16)に同じ。
- (注19)  $-\text{t} < *\text{d}^{\text{h}}\text{i}$ について, Eichner, 1975, pp. 80-81. Neu, E., Das hethitische Mediopassiv und seine indogermanischen Grundlagen (StBoT. 6), Wiesbaden, 1968, pp. 150-151。